

戦争をなくし、  
平和を築きあげるには  
どうしたらよいですか。



もりともたか  
森 智崇  
研修講師

平和の詩「生きる」

お聴聞を重ね、ご自身の戦争体験に何度も向き合われるご門徒がおられます。

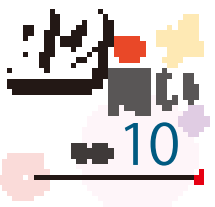
戦争の主体は国家であり、権力者によって戦争が引き起こされたとき、平和を望みつつもその正義、大義を容認した国民意識があったこと。そしてその意識の中では私たちの善、正義は結果的に逆らうものを許さない排他的な状況を作り、心では戦争に反対だと思っけていても、言葉にすれば非国民として扱われる恐怖に語れなかったこと。戦死を讃美する声の中に大切な人の死を悲しめず感情を押し殺したこと。戦死された方々は現在

の繁栄の礎をつくってくれた英雄と言われても、ただただ申し訳なかったと慚愧されるお姿…。

そのようなお話を日々いただく中で、2018年6月23日、沖縄県糸満市の平和祈念公園で行われた沖縄全戦没者追悼式で浦添市立港川中学校3年の相良倫子さんが読み上げた自作の平和の詩「生きる」は、心に強く響きました。

「(中略)みんな、生きていたのだ。私と何も変わらない、懸命に生きる命だったのだ。彼らの人生を、それぞれの未来を。疑うことなく、思い描いていたんだ。家族がいて、仲間がいて、恋人がいた。仕事があった。生きがいがあった。日々の小さな

# 戦争をなくし、 平和を築きあげるには どうしたらよいですか。



幸せを喜んだ。手を取り合って生きてきた、私と同じ、人間だった。それなのに。壊されて、奪われた。生きた時代が違っただけ、それだけで。無辜の命を。あたり前に生きていた、あの日々を。(中略)

私は手を強く握り、誓う。奪われた命に想いを馳せて、心から、誓う。私が生きている限り、こんなにもたくさん命を犠牲にした戦争を、絶対に許さないことを。もう二度と過去を未来にしないこと。全ての人間が、国境を越え、人種を越え、宗教

争は国家の権力者だけでできるものではなく、殺し合いを強いることをさせない社会の仕組みをも見つめなければならぬという、私一人だけでなく社会的な問題であり、過去の行いも見詰め、慚愧し続けることでもあるでしょう。

かつて正義の名のもと国民の宗教的感情が利用され、多くの方が戦地へ赴きました。また、戦死した方々を国が「英霊」として顕彰し、たたえることで戦争を遂行していく思想がつけられました。その構造は、国のために戦わされたという心情や怒り、思考が国に対して生まれることを麻痺させ、納得させるものでした。また世論もそれに同

を超え、あらゆる利害を越えて、平和である世界を目指すこと。生きる事、命を大切にできることを、誰からも侵されない世界を創ること。平和を創造する努力を、厭わないことを」

戦争の歴史や悲惨さを学ぶとき、繰り返しては行けない、平和でありたい、と年齢、時代を問わず誰もが願うことです。

一方、平和の実現に向け努力していく仕方、考え方はそれぞれに違います。現在では国と国を前提としない戦争(テロ)も生まれています。

調していきました。過去の事実には慚愧しつつ、今を注視しなくてははいけません。

ですが、私たちは善悪の価値規準を知っているつもりで生きていても、親鸞聖人は阿弥陀仏のご本願の前に、私たちの善悪は全くあてにならないと自己を見つめられます。そして真の仏弟子とは仏教、仏意、仏願に随順していく者だと受け止められ、そのように生きていかれました。

お念仏に生かされる私たちは、この教えを聞きつつ、いのちを奪えと命じるものに従わず、いのちを奪うことを納得させるものに従わないという自覚もあらたにして、一人ひとりが戦争の実態について知り、学ぶこと、

今私たちはどこに立っていいのでしょうか。

## この瞬間の延長線上に未来が

お釈迦さまは「すべての者は暴力におびえ、すべての者は死をおそれる。己が身にひき比べて、殺してはならぬ。殺さしめてはならぬ」と説かれます。

いかなる正義の名のもとにおいても戦争行為を絶対に善としない戒めです。「殺してはならぬ」という私への戒めであり、「殺させてはならぬ」という社会的な戒めでもあるのです。戦

そしてそのことを、戦争を明確に否定している仏教の教え、浄土真宗の教えに聞いていくことで、戦争へ向かわせる本質を知り、見抜く力を学び、私自身の悼みの中から、どんな戦争も許さないという願いをもって歩んでいくことが大切ではないでしょうか。また、それを対等な立場で語り合い、聞き合い、歩んでいくことが大切ではありませんか。平和の詩は続きます。

「私は、今を生きている。みんなと一緒に。そして、これからも生きていく。一日一日を大切に。平和を想って。平和を祈って。なぜなら、未来は、この瞬間の延長線上にあるからだ。つまり、未来は、今なんだ」